

Title	ジジウィックの思想体系——倫理学・経済学・政治学の関連から——
Author(s)	中井, 大介
Citation	大阪大学, 2007, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/47156
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉 大阪大学の博士論文について 〈/a〉 をご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

氏名	中井大介
博士の専攻分野の名称	博士（経済学）
学位記番号	第 20827 号
学位授与年月日	平成 19 年 3 月 23 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当 経済学研究科経済学専攻
学位論文名	シジウィックの思想体系—倫理学・経済学・政治学の関連から—
論文審査委員	(主査) 教授 堂目 卓生 (副査) 教授 佐村 明知 助教授 竹内 恵行

論文内容の要旨

本論では、古典的功利主義者として著名なヘンリー・シジウィック（Henry Sidgwick : 1838-1900）が倫理学・経済学・政治学を軸にした実践哲学体系を構築しようとしたことの意義を明らかにする。

出発点として、シジウィックが『倫理学の諸方法』（*The Methods of Ethics*, 1874）で J.S. ミル『功利主義論』（*Utilitarianism*, 1861）との相違を打ち出したことが重要である。直覚主義を否定し、快樂（幸福）に基づく帰結主義を合理的な道德原理として認める点でシジウィックはミルに同意する。しかし、「不満足なソクラテス」として有名な快樂の質的差異の論証を否定し、シジウィックは快樂の量的な大小のみを問題視した。そこで、ミルの言うように個々人の道德的洗練によって利己心と社会的幸福は完全に調和しうるのではなく、両者は究極的にも対立しうる（実践理性の二元性）とシジウィックは結論付けた。つまりシジウィックはミルのように個人の内面における「諸利益の普遍的調和」を期待することができなかつたのである。

以上のような議論はシジウィックの消極的結論と見なされることが多い。しかしながら、むしろこうした倫理的・道德的な人間観を出発点として、究極的にも生じうる個人と社会の間の利益の対立という現実的問題への対処などを、シジウィックは『経済学原理』（*The Principles of Political Economy*, 1883）と『政治学要論』（*The Elements of Politics*, 1891）で政府のなすべき役割やあるべき政府の構造として展開したと考えられるのである。

そうした背景には、19 世紀後半の科学主義の趨勢があった。シジウィックは混乱した状態にあった伝統的なモラル・サイエンスを倫理学・経済学・政治学を軸にした実践哲学体系として立て直そうとすると同時に、極端な人間像を仮定する H. スペンサーの社会科学や A. コントの実証主義を強く牽制した。また彼の実践哲学を究極的に規定するのは功利主義——社会的幸福の最大化——であったが、そこにはミルのような一元的な人間像ではなく、現実の二元的な人間像が据えられていた。

論文審査の結果の要旨

本論文は、ヘンリー・シジウィックの倫理学と政治学および経済学の関係を、はじめて詳細に検討した研究として高く評価できる。特に、従来、否定的にとらえられてきた「実践理性の二元性」問題に対して、シジウィックの実践哲学の基礎として積極的な意味づけを行った点が独創的である。本論文は経済学史研究のみならず、シジウィック研究、あるいは 19 世紀イギリス哲学研究に対して大きな貢献を与える可能性をもつと思われる。したがって、本論文は、博士（経済学）に値すると判断する。